

## 五合庵

五合庵は国上寺住職の隠居する庵であった。場所は国上寺の庫裏をへだてた崖下にある。国上寺へは表参道と裏参道があるが、五合庵は裏参道を登りつめた左側に建てられている。

良寛は、諸国行脚の末、寛政9年（1797年）頃から越後に戻り、後に国上山の五合庵で約20年を過ごした。山の中にたたずむ五合庵、静かで詩的な風景が、ここにはひっそりと息づいている。良寛はここで托鉢に出たり、座禅をしたり、「源子物語」、「万葉集」、「永平録」などを読み、また多くの漢詩、長歌、短歌を生み出したとされている。

五合庵の名は、国上寺の客層であった萬元上人が、一日あたり米五合を給されていたことに由来。なお、現在の五合庵は、大正3年に再建されたものである。

当時の五合庵はどのような建物だったのだろうか。

五合庵を建てた萬元和尚は、「筵八畳」の広さ。筵は畳よりも、やや広めに作られるので、部屋の広さは八畳敷きと考えられる（四畳半あるいは十二畳半の説もある）。

良寛の歌によれば、屋根は「檜の板屋」、柱は「竹の柱」、入口には「菰すだれ」がかかっていたことになる。また、簡単な窓もあったようだ。しかし、雨漏りはし、吹雪になれば、窓や入口の透き間から雪が入り込んで、筋を引くように積もったに違いない。

水は崖から流れ落ちる清水を利用していた。便所は別棟で、軒の低いものだったと考えられる。伸びてきた筍を哀れんで、屋根に穴を開けるのに蠟燭で便所を焼いてしまった話がある。この逸話は、良寛の五合庵時代末期のものと思われる。

昭和27年12月10日 新潟県指定文化財

